



Title	X (Twitter) 上のオンラインファンコミュニティに見られる配慮：炎上言及場面におけるファンの投稿に着目して
Author(s)	岸田, 月穂
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100475">https://doi.org/10.18910/100475</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# X (Twitter) 上のオンラインファンコミュニティに見られる配慮

## —炎上言及場面におけるファンの投稿に着目して—

岸田月穂 (言語文化学・D1)

### 1. 研究概要

現在は、ソーシャルメディア (SNS) の普及に伴い、誰もが情報発信を行うことができる時代である。それに伴い YouTube などの動画共有・配信サービスを利用して発信を行う人々（以下、配信者）が増加している。配信者の中には、インフルエンサーすなわちネット上の「有名人」になる人が存在する。このような状況の中、SNS 上では配信者に対する炎上や誹謗中傷が頻繁に発生している。伊藤(2022)は、「わがままなファンが有名人に対して行う誹謗中傷」が、日本の誹謗中傷の第三期を作り上げていると指摘し、ファンと有名人間で生じる誹謗中傷について検討する重要性を示唆している。本発表では、ファンが応援対象を誹謗中傷したと解釈され炎上した事例に対する他のファンの態度やその背景に存在するイデオロギーを検討する。発表者は、2022年12月から現在に至るまで、誹謗中傷や炎上が頻繁に発生する配信者グループのオンラインファンコミュニティ（以下、対象ファンコミュニティ）のオンライン上の参与観察を行っている。本発表では、言語人類学的な視座から参与観察期間中に発生した炎上にファンが言及する場面（以下、炎上言及場面）の相互行為や投稿を分析することを試みる。本発表の研究設問（RQ）は以下の3つである。

- RQ1: 炎上言及場面において、ファンは炎上をどのように捉えているか
- RQ2: 炎上言及場面において、ファンはどのような相互行為・投稿を行っているか
- RQ3: 炎上言及場面に見られるファンの誹謗中傷に関するイデオロギーはどのようなものか

### 2. 分析枠組み

#### 2.1 「荒らし」の記号的様相と相互忘却

野澤(2018)は、コミュニケーションの6機能(Jakobson, 1960)を参照し、「荒らし」が「コミュニケーションの出来事におけるディスコードンス」(p. 230) を発生させる要素（表1）を検討した。

表1：炎上の要因（野澤（2018）を参考に筆者作成）

コミュニケーションの機能	メッセージの特徴	炎上要素（例）
表出機能	送り手を指標	病的な話者（自作自演）
動能機能	受け手を指標	受け手の社会的・行動的属性（人格攻撃）
指示機能	指示対象を指標	指示内容の不一致の強調（クソリブ）
メタ言語機能	コードを指標	文法的・語彙的逸脱による属性の判断（老害）
詩的機能	自身の形式を指標	メッセージの形式（長文乙）
交感機能	導体・接触を指標	インターネットの仕組み（荒らしスクリプト）

これらの要素がメッセージの受け手によって強く表出することで炎上が発生しうる。また、炎上に対しては、「スルー」「削除」などの相互忘却の手段が取られることがある。野澤（2018）は、このような炎上対処法の背景には、「荒らしが非人間のオントロジーであり、それとは『対話』できない、という根本的な記号イデオロギー」(p. 230) が存在することを指摘している。

## 2.2 炎上の背景にある言語イデオロギー

言語イデオロギーとは、「言語とその使用者の社会観や人間観を映し出す価値体系」(井出他, 2019: 46)である。Chun(2016)は、投稿者の人種差別的表現によって炎上したYouTube動画に対するコメントに隠れた言語イデオロギーを解明した。井出他(2019)は、投稿者に対する擁護コメントにおける「話者中心的言語イデオロギー」(p. 195)の存在、人種差別を向けられた人々が抱く「遂行的言語イデオロギー」(p. 197)の存在を指摘している。前者は、「ことばの意味は話者の意図で決まる」という言語イデオロギー、後者は「話者の意図ではなくことばがもたらす心の傷という影響を重要視する」という言語イデオロギーである。

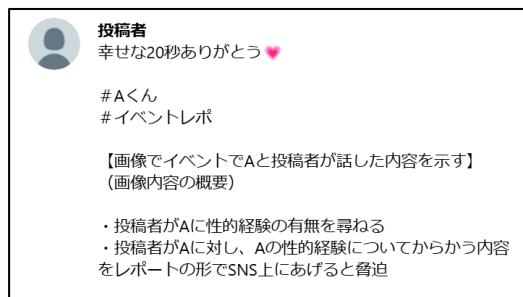
## 3. データ概要

本発表では、対象ファンコミュニティにおいて2023年3月21日に発生した炎上(以下、本事案)に関する投稿を分析する。表2は、本事案の炎上関係者の概要である。

表2 炎上関係者概要

炎上関係者	属性
① 投稿者	炎上したファン
② 配信者A	応援対象
③ るな(発表者), しおり, えり(研究協力者)	炎上を観察するファン
④ 第三者	X上に存在する不特定多数の人々

本発表で主に分析対象とするのは、③の炎上を観察するファンが①の投稿者が行った炎上投稿に対して言及する投稿・相互行為である。本事案で炎上したのは画像1の投稿である。



画像1 炎上原因投稿<sup>1</sup>

投稿者がAに対して性的な質問を行い続け、質問に答えないAに対し、「X上で話した内容をさらす」と脅す様子が示されている。投稿者は炎上したことを受け、投稿が虚偽の内容であることを明かし謝罪した。しかし、投稿がAへの誹謗中傷であるという理由で炎上は収まらず投稿者はアカウントを削除した。画像2は、画像1に関するるなとしおりのやり取りである。

<sup>1</sup>倫理的配慮の観点から、①仮名の使用、②投稿内容の概要が伝わる程度の変更を行っている。画像2～画像5に関しても同様である。



画像2 るなとしおりのやり取り

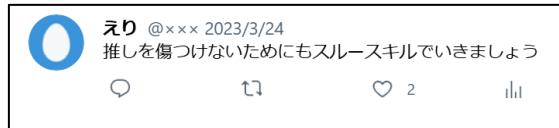
画像2では、炎上の内容を尋ねたるるなにしおりが、「ファン（投稿者）がイベントで気持ち悪いことを聞いた」と説明している。このことから、しおりは画像1のメッセージに嫌悪感を示していることが伺える。そして、Aがやり取りを見る可能性があるタイムライン上ではなく、2人だけのコミュニケーション空間であるDMに移動する提案をした。2人がAを心配する言動を行っていることから、この移動は、Aが炎上を見る上で傷つかないための配慮であると捉えられる。

また、画像2で見られた炎上言及場面における推しを表すハートマークの絵文字使用は、対象ファンコミュニティにおいて「エゴサ避け」と呼ばれている。「エゴサ避け」とは、推しがエゴサーチを行う際のことを考慮して、投稿が相手に見えないように配慮する行為のことである。エゴサ避けやDMへの移動は、応援対象が傷つき得る投稿を隠す配慮である。この配慮の実践は、2人が誹謗中傷の「影響」を重要視する遂行的言語イデオロギーを抱いていることを示唆している。画像3は2人がDMに移動した後のやりとりである。



画像3 しおりとるなのDMでのやり取り

「ネタだとしても害悪行為」（しおり）や「冗談だとしても人を不快にさせている」（るな）など、2人は「投稿者は冗談のつもりだったのではないか」等の「話者中心主義的言語イデオロギー」に基づいて投稿者を擁護する言説を否定している。また、「ファン名乗らないで欲しい」（しおり）のように、投稿者は自分たちと同じファンとして認めない態度が現れている。全体を通して、2人は投稿者への嫌悪感を表出し、行動を否定する言動を行っている。また、画像3には、2人のファンの評価が低下することに対する懸念が見られる。2人は応援対象を傷つけ、ファンの評価を下げた投稿者をコミュニティの構成員として認めず攻撃対象としたと考えられる。画像4は、画像1の炎上を受けてえりが行った投稿である。



画像4 えりの投稿

スルースキルは、「SNS 上での対人的な摩擦を回避したり、他者からの挑発を無視したりする行動」(高橋他, 2016:41)である。えりは、「推しを傷つけないため」のスルースキルをファンに要求している。野澤(2018)は、「スルー」には、荒らしの集合性・群衆性を収束させる効果があり、炎上や荒らしに対する実践知として強調されることを指摘している。画像4の投稿を通じて、えりは誹謗中傷に対する遂行的言語イデオロギーに基づく応援対象Aへの配慮のためのスルーをファンの規範として提示している。また、前述した野澤(2018)の指摘に鑑みると、スルースキルの要求は、えりが本事案を「非人間のオントロジーであり、対話できない」問題として捉え、投稿者を対象ファンコミュニティの中で「対話できない他者」として位置づけていることを示唆している。

#### 4. 考察・結論

本事案は、受け手である応援対象への人格攻撃、投稿者の自作自演、Xの拡散性というメッセージが強いとファンに解釈され炎上した (RQ1)。炎上言及場面では、「エゴサ避け」や「DMへの移動」など応援対象に誹謗中傷を隠す行為、「スルースキルの要求」のように誹謗中傷の拡散を防ぐ要求が確認された。これは、ファンが誹謗中傷によって受け手が傷つくことを避けるための配慮の相互行為である (RQ2)。この配慮の背景には「誹謗中傷の被害者にもたらされる傷(影響)を重要視すべきである」という遂行的言語イデオロギーが存在している (RQ3)。ファンが応援対象を傷つけた投稿者に対して攻撃的な言動を行っていたことは、応援対象を傷つけることを許さないという態度の表明であり、このイデオロギーの存在を裏付けている。それと同時に、ファンは応援対象を誹謗中傷から守ろうとする一方で、投稿者に対しては「害悪」「気持ち悪い」などの攻撃的な言動が確認された。これは、ファンが抱く誹謗中傷に対する遂行的言語イデオロギーとは矛盾する行動であり、複数の参与者が存在するSNS上のコミュニケーションの特徴であると考えられる。また、投稿者への攻撃が「タブーを犯した」ということに基づいて正当化されている可能性もある。今後は、炎上の原因である投稿者に対するコメントに着目することで、誹謗中傷や攻撃の正当化の観点から、誹謗中傷に関するイデオロギーの様相を精緻に捉えることを目指す。

#### 参考文献

- 井出里咲子, 砂川千穂, 山口征孝(2019).『言語人類学への招待 ディスコースから文化を読む』ひつじ書房  
伊藤昌亮(2022).『炎上社会を考える 自肃警察からキャンセルカルチャーまで』中央公論新社  
高橋尚也, 伊藤綾花 (2016). 「SNS 利用における青年の対人関係特性: Twitter と LINE 利用時の行動に注目した検討」. 『立正大学心理学研究所紀要』(14), 39-50.  
Chun, E.W.(2016). "The Meaning of ching-chong: Language, racism and response in new media". In *Raciolinguistics: How Language shapes Our Ideas about Race*. 81-96.  
野澤俊介 (2018) 「『荒らし』と相互忘却」武黒麻紀子 (編)『相互行為におけるディスコード: 言語人類学からみた不一致・不調和・葛藤』ひつじ書房, 217-235.  
Hill, J.H. (2008) *The Everyday Language of White Racism*. Oxford: Wiley –Blackwell.  
Jacobson, R. (1960) "Closing Statements: Linguistics and Poetics" In *Styles in Language*. 350-377.